

## 「読み取り」と「読み解き」の往還

中川一史 (D-project会長/放送大学教授)

情報活用能力の議論が続いています。特に、「情報技術の活用」「情報技術の適切な取り扱い」「情報技術の特性の理解」に注力して進められる議論が、全国大会のある2026年3月時点で進んでいます。

一方、筆者は情報技術だけでなく、情報活用そのものを今後どのように学習の基盤となる資質・能力として教科横断的に意識していくのか、これからこそ重要に考えています。子どもが情報活用する際には、第一に「目的や主張のために、情報獲得を試みる」、第二に「データを読み取り、問題や実態を把握する」、第三に「データを読み解き、原因を推測したり解釈したりする」、第四に「読み解いたデータから問題を解決したり提案をする」というようなプロセスを経ていきます。そして情報を読み解くことは、読み取ることと密接にからんでいます。ときどき、どこから読み取ったのか、よくわからない読み解きの授業場面に出会うことがあります。こうなると、「たぶんこうかな」とか「だってこっちの方がいい感じがする」などのアバウトな理由になります。

情報の「読み取り」と「読み解き」は、例えば、小学校学習指導要領解説社会編「第5学年の内容」では、「地形や気候などに着目して、地図帳や地球儀、各種の資料で調べ、まとめ（※読み取り）、国土の自然などの様子や自然条件から見て特色ある地域の人々の生活を捉え、国土の自然環境の特色やそれらと国民生活との関連を考え、表現する（※読み解き）ことを通して、我が国の国土の地形や気候の概要を理解するとともに、人々は自然環境に適応して生活していることを理解できるようにすることである。」としています。また、学習活動場面では、国語科において、叙述や表現、文の構造に留意しながら中心人物の様子や行動を表す語や文を抜き出し（※読み取り）、それらの情報を比較したり関連づけたりして整理し、人物の行動やその裏にある心情の変化をつかみ、作者の主題に迫る（※読み解き）ということを行っています。

このように、情報活用能力を校内研究のテーマにしていな

くても、どの教科でも横断的に意識すべき能力なのです。総合的な学習の時間だけでなく、教科と連携しながら育んでいくものと考えます。

中央教育審議会が2024年に公開した「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」によりますと、「実体験の格差やデジタル化の負の側面等を指摘する声もあります。『デジタルキャリアか』、『デジタルか紙か』といった二項対立に陥らず、『デジタルの力でリアルな学びを支える』との基本的な考えに立ち、バランス感覚を持って、積極的に取り組む必要があります。」としています。デジタル学習基盤を視野に入れて学習活動を展開していくようにはなりましたが、何でもデジタルが最適とは限りません。

D-projectも、GIGA 端末環境全盛期の今、情報技術の活用の実践事例も多く創出していますが、今だからこそ、情報活用そのものをしっかり視野に入れて実践を追究していきたいと思います。

さて、2025年度D-project全国大会in和歌山のテーマは、「子どもを信じて学びを拓く～委ねる授業に効く教師の伴走と見とり～」です。ここで提案したような情報活用そのものを学習の基盤となる資質・能力として捉え、子どもに委ねる授業づくりをする際に「教師の役割」はどのように変化するのでしょうか。

課題意識をもって授業に取り組んでいるD-projectメンバーや参加者の皆さんと、そして陰で支えてくれている賛助会員の方々と論議して、明日の授業への見通しをもっていこうではありませんか。



D-Projectは  
メディア創造力の育成を目指します

●D-project サイト (<https://www.d-project.jp/2025/>)

## D-PRESS VOL.15 | CONTENTS

■巻頭メッセージ 「読み取り」と「読み解き」の往還	1	■プロジェクト紹介	3
■これから1年、D-projectが問い続ける3つの視点	2	■各支部情報 ただ今、定例会中	4
視点1「委ねるために、どういう力を育てるか」		■賛助会員一覧、編集後記	4
視点2「どのような授業をデザインするか」			
視点3「どこで何を見とって、どう振るまうか」			

視点  
1

委ねるために、  
どういう力を育てるか

小林祐紀 (放送大学)

山本五十六は、「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」と述べ、さらに「任せてやらねば、人は育たず」と続けた。授業を子どもに委ねるとは、活動を預けることではない。任せられるだけの力と環境を、教師が意図的に整えることが必要である。

第一に求められるのは、情報活用能力の育成である。個別最適な学びを実現しようとすれば、子どもは一人一人異なる学習リソースにアクセスすることが増加する。多様な情報源に触れる機会が増えるからこそ、目的に応じて選択・活用する力が不可欠である。課題設定、情報の収集、整理・分析、根拠に基づく表現という一連の過程を自ら遂行できこそ、学びは主体的な営みとなる。その際、教師は学習のゴールを共有したり、学習過程をモデルとして示したりする必要がある。

第二に、学習者が授業の中で自己調整しながら学ぶ機会を保障することである。その中核には学習方略の獲得がある。例えば体制化方略は、単にノートを書き写すのではなく、概念同士の関係を図式化したり、見出しを立てて再構成したりする営みである。こうした方略を身に付けることで、学習者は学びを進めやすくなる。具体例を示し、学習環境を整え、振り返りを通して定着させることを大切にしたい。

第三に、学ぶための学級集団づくりである。互いの違いを尊重し、安心して試行錯誤できる関係性があるからこそ、学びは子どもに委ねられる。対話を重ね、耳を傾け、責任を共有する集団を形成することが前提となる。集団づくりを通じて、仲間と共に課題解決に向かうことのできる対人技能や他者を尊重する姿勢を身につけたい。

授業を委ねるとは放任を意味しない。示し、支え、認め、そして任せるという段階を踏むことによって、子どもは真に学びの主体となるのである。



視点  
2

どのような授業を  
デザインするか

中橋 雄 (日本大学)

ここでは学習者主体の授業をデザインするために有効な「学習サイクル」と「教師の着目要素」を紹介する。学習者が取り組みたいと思えるリアリティのある課題・ゴールを設定し、「相手意識・目的意識を持つ」「見る」「見せる・つくる」「振り返る」といった「学習サイクル」を積み重ねていく中で、次に示す「教師が着目すべき要素」を意識してもらいたい。

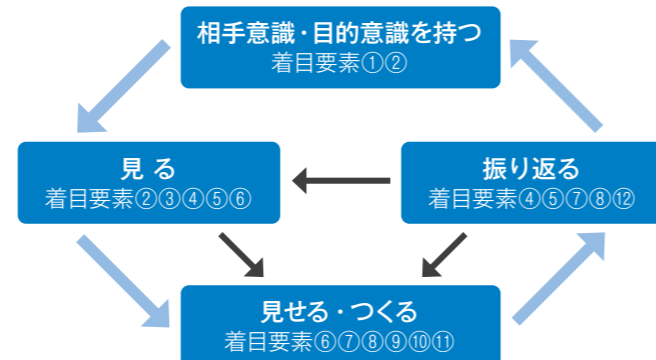
まず、「相手意識・目的意識を持つ」学習では、「①リアルで必然性のある課題を設定する」「②好奇心や探究心、発想力、企画力を刺激する」ことを意識したい。

次に、「見る」学習では、「②好奇心や探究心、発想力、企画力を刺激する」「③本物に迫る眼を養う」「④自分なりの視点を持たせる」「⑤差異やズレを比較し、実感させる」「⑥映像と言語の往復を促す」ことを意識したい。

そして、「見せる・つくる」学習では、「⑥映像と言語の往復を促す」「⑦社会とのつながりに生かす」「⑧建設的妥協点(=答えが1つではない)に迫る」「⑨失敗体験をうまく盛り込む」「⑩デジタルとアナログの双方の利点を活かす」「⑪メディア創造力を追究する中から基礎・基本への必要性に迫る」ことを意識したい。

さらに、「振り返る」学習では、「④自分なりの視点を持たせる」「⑤差異やズレを比較し、実感させる」「⑦社会とのつながりに生かす」「⑧建設的妥協点(=答えが1つではない)に迫る」「⑫自らの学びを振り返らせる」ことを意識したい。

授業においては、誰と一緒に学ぶのか、用いるツールを含め、どのような学び方・表現方法を採用するのかなどについて、学習者にどこまで委ねるか、その判断は教師が責任をもつ必要がある。授業後も学習者が学習の見通しを持ち、根拠をもって判断し、学びを深め、成長を実感できるように、教師が学びの場としての授業をデザイン・創造することが重要である。



学習サイクルと12の着目要素 (D-PRESS Vol.13リレートークより)

視点  
3

どこで何を見取って、  
どう振るまうか

山中昭岳 (さとえ学園小学校)

～「失敗」を学びに変える伴走と

試行錯誤を支える学習環境デザイン～

「学びを委ねる」=教師の存在感はむしろ増す。全体ではなく、子どもたち一人ひとりへの存在感、すなわち、子どもたちの学びのプロセスに深く潜り込み、最適なタイミングで「交通整理」を行う伴走者としての存在感である。

○「失敗」を評価の指標に据える

見取りの際、二つの評価軸を設定する。一つは、定量的な視点としての「失敗の数」。デジタルなら「Undo (やり直し)」が何度でも可能である。この特性を活かし、どれだけ多くの「うまくいかない方法」を発見したか、その挑戦の回数を称賛する。もう一つは、定性的な視点としての「挽回のプロセス」。行き詰まった際に、何が原因かを推論し、どう軌道修正を試みたか、このリカバリーの質を見取ることである。評価とは採点することではなく、子どもが自らの失敗を挫折と捉えるのではなく、「次の一手へのデータ」として挑戦を継続し、改善し続ける前向きな姿勢を生み出すものとなる。

○試行錯誤を加速させる「学習環境」の構築

こうした見取りを機能させるには、前提となる学習環境の構築が欠かせない。物理的なツールの整備についてはここでは割愛するが、もう一つの重要なポイントとして、「失敗しても大丈夫だ」という心理的安全性の保障である。日頃から「ナイス・ミス賞」など、失敗から得た気づきをクラス全体で共有する文化を耕しておく。また、互いの学びをいつでも参照し合える「緩やかな共有環境」を整えることで、一人の失敗と挽回が、他者の新たなインスピレーションへと繋がる連鎖を生み出す。

○最高の「壁打ち」相手、そして、最適な「壁」になる

子どもの思考を整理する「問い返し」、背中を押す「共感」、思考停滞時にあえての「ゆさぶり」。教師という壁に自分の考えをぶつけ、跳ね返ってきた反応から自律的に軌道修正していく。この「壁打ち」の往復を重ねる支援、そしてこの「壁」を乗り越える成功体験が、子どもたちが自らの足で力強く自走し続けるためのエンジンとなる。

D-project  
プロジェクト2025

「主体的・対話的で深い学び」を実現させるためにはどうすればよいでしょう。

D-projectでは「メディア創造力の達成目標」を設定し、この学びを実現するためにプロジェクトを行っています。

特色あふれるそれぞれのプロジェクトの1年間の足跡を、Webサイト(QRコード)でご確認いただくことができます。



- 寺子屋リーフレット制作
- 「カンボジアに寺子屋を!!」本物リーフレット制作
- 特別支援アラカルト
- 特別支援教育でICTの活用場面と方法の具体を提案
- 国際協働学習の設計と評価
- 国際協働学習のノウハウ、実践を踏まえて
- AIと教育
- OpenAI ChatGPTやGoogle Gemini、Microsoft Copilot等のAI活用の教育実践研究
- STEAMキッズプロジェクト
- 教室を飛び出し、ものづくりを通した問題解決力
- 算数・数学とプログラミング的思考
- Mathpubでプログラミングライクと数学の考え方を同時育成
- データベース活用
- 調べ学習からデータベース活用の新たな価値を見出す
- フォトボエム
- 写真と言葉を組み合わせ、表現することの楽しさを
- Everyone Can Create
- クリエイティブな表現をとりいれた授業づくり
- 小学校英語メディア創造力
- 楽しく面白く身に付く小学校外国語での効果的な活用
- School XR
- 空間表現や奥行き感のある表現を生かした活動へ
- 3Dプリンタも活用したまちおこし協力隊
- 学校間交流による地域の魅力を伝える
- マメ記者プロジェクト・準備会
- 新聞活用で社会にひらかれた学びの実現

## 各支部情報



ただ今、  
定例会中

全国各地で、  
よりよい授業を創りだそう  
という思いを持った  
熱い先生方が集まって  
情報交流しています。  
地域の色が出ています。  
ぜひ近くの支部に参加して  
「子どもたちと共につくる」  
授業改善の視点を、  
あなたのものにしませんか。

### ◆北海道支部◆

世話人: 福士晶知  
(千歳市立千歳第二小学校)

### ◆金沢支部◆

世話人: 福田晃  
(金沢大学附属コラボレーション推進室)

### ◆関東支部◆

世話人: 近藤睦  
(横浜市立富士見台小学校)

### ◆東海支部◆

世話人: 菊地 寛  
(浜松市立大瀬小学校)

### ◆関西支部◆

世話人: 山本直樹  
(関西大学初等部)

### ◆香川支部◆

世話人: 増井泰弘  
(丸亀市立飯山北小学校)

### ◆松山支部◆

世話人: 石田年保  
(松山市立堀江小学校)

### ◆高知支部◆

世話人: 市原俊和  
(土佐市立高岡中学校)

### ◆熊本支部◆

世話人: 藤田英明  
(菊池市立七城小学校)

### ◆沖縄支部◆

世話人: 馬淵大輔  
(那覇市立松島小学校)

## 賛助会員一覧

いつもご支援をいただき、感謝申し上げます！

Sky株式会社

<https://www.skymenu.net>

スズキ教育ソフト株式会社

<https://www.suzukisoft.co.jp/>

 スズキ教育ソフト株式会社

ソフトバンク株式会社

<https://www.softbank.jp/>



株式会社青井黒板製作所

<https://www.aoikokuban.co.jp/>



泉株式会社

<https://www.izumi.inc/manaboard/>

まなボード

IZUMI

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

<https://www.unesco.or.jp/>



公益社団法人  
日本ユネスコ協会連盟

JR四国ソリューション株式会社

<https://www.collabonote.com/edu/ex/>



公益財団法人 理想教育財団

<https://www.riso-ef.or.jp/>

公益財団法人 理想教育財団  
RISO EDUCATIONAL FOUNDATION

テクノホライズン株式会社

<https://www.elmo.co.jp/>

株式会社ガイアエデュケーション

<https://www.gaia-edu.co.jp/>



ダイワボウ情報システム株式会社

<https://sip.dis-ex.jp/>



株式会社フルノシステムズ

<https://www.furunosystems.co.jp/>

FURUNO SYSTEMS

ショウワノート株式会社

<https://www.showa-note.co.jp/>



株式会社DynaxT

<https://wp.dynaxt.co.jp/>

 株式会社DynaxT

ブリタニカ・ジャパン株式会社

<https://www.britannica.co.jp/>



株式会社教育ネット

<https://edu-net.co.jp/>

 教育ネット  
Education Network

Link Aid合同会社

<https://link-aid.com/>



エプソン販売 株式会社

[https://www.epson.jp/b\\_solution/bunkyo/](https://www.epson.jp/b_solution/bunkyo/)



## 編集後記

中央教育審議会に「次期学習指導要領の在り方」が諮問され、2030年度の改訂に向けた議論が始まりました。生成AIの急速な普及、多様性への対応、教師の働き方改革…課題は山積しています。けれども、どれだけ制度が変わっても、いつも子どもたちと共にある教師の「授業観」が変わらなければ、学びは変わりません。D-proが大切にしてきた「子ども自らが学ぶ」「創造性の育成」は、今こそ見つけ直す時です。皆様と立ち止まって考える「タネ」をD-PRESSに込めて。  
(2026.03 編集長 佐藤幸江)